JICA シニアボランテイア 千葉

SVニュース千葉 第29号
2018年10月２日発行
千葉県JICAシニアボランティアの会
Info.chibajicasvob@gmail.com

本号目次

通常総会・人事 公開講演会	1-2
活動報告会	2-4
出前講座	4- 5
派遣国事情	6-7
会員の動静 国際フェスCHIBA 浦安多文化フェア 県庁表敬訪問	8

公開講演会・平成３０年度総会を開催

5月12日(土)午後1時半より浦安市の国際センターで、来賓諸氏をお迎えして公開講演会と通常総会を開催しました。 公開講演会は、エクアドル人と結婚し、現在は、日本とエクアドルに半年間ずつ住んでいる小林夫妻から、興味あふれる現地事情を話して頂きました。（2頁に詳細を掲載）

引き続き平成30年度通常総会が行われました。出席者34名、委任状50名で、総会は、会員総数113名の74%であり、過半数を超えるので開催要件が成立しました。

1号から7号議案までは、原案の通り、全て承認されました。特に、6号議案の4項（会費増額）については、賛否両論がありましたが、賛成多数で認められました。

会長　ご挨拶　　渡邉　要吉

皆様、本日は講演会及び平成30年総会にご出席いただきまして大変有難うございます。

本日は、ご来賓として、JICA東京センター長谷川次長、青年海外協力隊千葉OB会浜田会長、また当会場を提供頂きました浦安市国際センター渡辺センター長、JICA千葉ディスク永井氏にご臨席いただきました。

私たち千葉県JICAシニアボランテイアの会は会員が113名になりました。JICA東京の3月31日付けの資料によりますと、戦後開発途上国に援助を始めて以来、52,045名のボランテイアが派遣されてきました。そのうち6,887名がシニアボランテイアであります。千葉県出身のシニアボランテイアは407名で、そのうち113名が当会の会員であります。

今日はこれから、エクアドルから来られました小林さんご夫婦の講演をお楽しみいただければ幸いです。

また、総会の方は、先ほどJICA東京の長谷川次長からのお話の通り、諸般の事情でJICAからの当会への支援経費が減少しますが、会の事業運営を維持できる態勢をとる努力を継続していきたいと存じます。

今日は十分に議論をし、総会の後に懇親会もございますので、また楽しく親睦を深めてお帰りいただければ幸いであります。

・平成30年2月から平成30年9月までに当会に合計15,762円の寄付が以下の方々よりありました。
　中村時夫、岩谷浩司、川奈部くに子、伊藤義博、江田隆正、榎本良弘、岡崎英子、有志一同（敬称略）
・各種イベント時の国際クイズの景品として、以下の方々から、外国からのお土産を寄贈していただきました。
　武藤達雄、品川洋之助、品川 雅子、黒田 啓嗣（敬称略）　　大変ありがとうございました。

平成30年度　新役員人事

・会　　長　渡邉　要吉 (船橋市)	・幹事　伊藤　義博　(千葉市)	・幹事　三輪　達雄　(我孫子市)
・副 会 長　村田　淑子 (東京都)	・幹事　岡崎　英子　(千葉市)	・幹事　弓　貞子　(浦安市)
・事務局長　濱崎　丘　(柏市)	・幹事　崎元　雄厚　(千葉市)	・特任委員　登内　明　(浦安市) (浦安市民大学と連絡)
・会計監査　佐藤　聡　(東京都)	・幹事　添野　良一　(鎌ヶ谷市)	

第２４回 公 開 講 演 会　　小林明夫氏、アナ夫人

「エクアドル人の妻との二人三脚」

講演会は今回で24回目となりました。好天で土曜日でしたが、来賓4人を含め58名の参加者で研修室は一杯でした。

「**初めのエクアドルってどんな国**」では、まずエクアドルの国旗（3色に紋章入り実物）と、国名（赤道の意味）の説明がありました。赤道の記念碑の場所、首都のキト、世界自然遺産第1号のガラパゴス諸島などを地図と写真を見せながら紹介されました。続いての総人口と原住民の割合、産業、宗教、通貨などの説明でエクアドルの概略が掴めました。成田から飛行機で20時間余りもかかるという話に、その遠さの実感が参加者には沸いたと思います。

「**エクアドルを一口で言うと**」では、インカ帝国の北の都として栄えた後に、16世紀にスペインの統治が始まり、その都市が現在もそのまま、国土全域にコミュニティとして残り、さらに文化としても定着していることなどの説明がありました。はるか遠いインカ帝国とスペインの文化が共存して、今に伝えられている国として新たな興味をそそられました。

続いて「**第3の都市クエンカについて**」は、アナさんの故郷であり、お二人のエクアドルでの生活の場、標高2,350m、人口３０万人、市の中心部の旧市街地は500年前のコロニア風建築、石畳みがそのまま続き馬車が闊歩していたことが想像できる世界文化遺産指定都市、そのど真ん中にそびえるカテドラルは荘厳でした。一方新市街地では、川で洗濯をするケチュア族の人々の日常がみられ、新旧の時代が交錯する風景が目に浮かびました。

「**市場（メルカード）と生活**」の話では、豊富な果物や野菜が並び、数々の魚の種類など、エクアドル人の豊かな食生活が想像できました。フライやスープにと調理用の緑色の巨大なバナナ、ジャガイモ原産地ならではの種類の多さにはびっくりしました。さらに生きた鶏、七面鳥、そしてクイ（モルモットの一種）を抱きかかえて買って帰る人々など、逞しく生きる姿を垣間見た場面になりました。

最後の時間で、小林さんがアンデスの楽器、ケーナとサンポーニャで「コンドルは飛んでいく」「花祭り」の曲を披露。その音色ははるかアンデスの風に乗って奏でられた郷愁を誘うものでした。曲に合わせてアナさんが軽やかなステップを踏み、息の合ったご夫婦の雰囲気は、講演のテーマ通りに皆さんへ伝わったと思われます。エクアドルの家賃と生活費は？ケーナの音の出し方は？などの質問とエクアドルの民族衣装の説明を聞いて講演は終わりました。

第25回 活 動 報 告 会

9月7日(金)、4名のボランティアによる報告会を千葉市民会館で行いました。来賓には、浦安市国際センター長渡辺氏、JOCV千葉OB会会長浜田氏、千葉県庁から加藤氏が来られ、浜田氏からご挨拶を頂きました。

報告会には暑い中27名が参加、弓幹事が進行を担当し、報告者からは活動内容や現地での体験や感想などが話されました。

「コロンビアの災害ボランティア」　伊藤　義博

コロンビアに２回目の赴任となった首都ボゴタ市、標高2,600mの高地にあります。私の活動場所は防衛省にある災害ボランティア組織（デフェンサ・シビル）という日本で言えば、消防団の研修所のような所です。その組織のメンバーが全国に約127,000人いて、毎週40名程の研修生が、全て自費で、中には自宅からバスで十数時間かけてやって来る人もいます。コロンビアのボランティア意識の高さは日本も見習うところがありそうです。歴史の違いもあるかもしれませんが、その根底には愛国心の高さもありそうです。熱狂的なサッカーの応援にもみられるように、自分たちの民族のために、また、お互いに助け合う精神が根付いているのでしょう。

私はこの研修所で日本の防災技術を紹介し、災害時の救助活動、隊員の安全管理等を主に支援しました。また、その時期に熊本地震が発生したことから、震災対策や実際の災害活動について紹介しました。

この研修所はボゴタ空港の西側にあり、広大な畑のど真ん中で、通勤約2時間、デコボコのひどい道路を通過しなければなりません。雨が降るとさらにひどく、乾燥するとほこりで窓が開けられません。こんなにひどい道があるのかと毎日苦痛でした。しかも専用のワゴン車はオンボロで、1時間以上遅れるのは普通です。しかし、ここに勤務するインストラクター達の専門家は、生きがいを持って活動しているのには感銘を受けました。

「グアテマラに学んだこと」　江田隆正

私は平成26年7月より2年間、中南米のグアテマラに廃棄物処理の専門家として活動しました。派遣先のケツァルテナンゴ市はグアテマラ第2の都市で、市中のゴミは町の中心地区のみ収集し、町外れのごみ処理場に投棄するだけです。急激な都市化により、周辺からの人口集中と大量のプラスチックが流通していて、古くからある市場では、プラスチック容器が散乱しています。子供たちや一部の大人は、環境教育によりゴミ処理の問題を理解していますが、人々の生活の格差が、ごみ処理とそのリサイクルに追い付いていません。そこで私は、リサイクルシステムの再構築を推進してきました。

しかし、私の任期中に大統領選挙があり、その際に私の所属先の部長も交代することになり、首長が変わると行政も一旦リセットされます。新しい市長は、まず不正が「ある無し」にかかわらず前職長を調査することから始めます。これが民主主義です。新しい部長がゴミ分別を推進しているようですが、残念ながらその歩みは「2歩下がってから3歩進む」です。

私の任地はマヤ民族が多い地方都市でした。中南米特有と言われますが、陽気で楽天的な人々と一緒に仕事すると教わることが多くあります。特に女性たちは、マヤの民族衣装に誇りを持って着ています。日本も見習うところがあるようですね。

「ガーナの電子工学教育事情」　榎本良弘

平成27年3月からガーナに赴任。「Ho Poly Technic（現在はHo Technical University）」にて電子工学の実習・実験を担当しました。

電子工学は実学。実習・実験は生徒一人一人が行うことを目指し、実験室の整備、実験機材・電子部品の入手等を行いました。

最初の3か月に取り組んだのは、私が赴任する5年前に、導入したものの使われていなかったPLC（Programmable Logic Controller）の使用を開始することでした。その理由を一つ一つ解決し、使い始めたことにより、学校の他の先生から信頼を得ることができました。

次に取り組んだのは、実験室の整備。一回の授業で12名の実習を行えるように、実験室及び机の整備を行いました。また、赴任1年目は、授業中に突然停電することが多く、電気がないとPCを使っての授業は出来ないため、知人の会社よりノートPCを寄贈いただき、2年目からは計画的に授業をすることができました。

PCで使用するソフトウェアはすべて無償の物（電子回路シミュレーター、電子回路CAD等）を入手し、授業で使用するとともに、希望する生徒には配布しました。放課後は実験室を開放し、いつでも生徒がPCを使えるようにしました。

2年目に、学校がPolytechnicからTechnical Universityに昇格することになりました。これにより、先生の資格要件が変わったため、多くの先生が大学院に行くことになり、私と一緒に勉強する時間が無くなったため、生徒の指導に注力することになりました。

何人かの生徒は興味を持ち、真剣に勉強してくれたので、結果良しでありました。

「モロッコの音楽教育」　岡崎英子

チュニジアの音楽大学でピアノを教えるはずが、テロの影響で任国変更となり、派遣されたのはモロッコでした。

任地は、北部地中海に程近い世界遺産の街、テトゥアン。スペインのアンダルシアを思わせる、山を埋め尽くすような白い家並みが印象的な、美しい風景に魅せられた一方、任務は、中学校音楽教育の充実を目的とした教員の支援に変更となり、全く経験のない仕事に戸惑いながらの赴任となりました。

その上、生活使用言語はフランス語となっていたのに、街中ではスペイン語でないと通じ難い上、アラビア語モロッコ方言(ダリジャ)しか分からないという人も多く、仕事、生活両面で前途多難なスタートとなりました。

モロッコでは、音楽の授業が行われているのは一部の中学校のみのため、予算もなかなか付かず、テトゥアンでは音楽室どころか、楽器もない学校も少なくありませんでした。また、日本の教員養成システムとは違うため、殆どピアノが弾けない教員もいるなど、問題も多々ありました。

けれど、共に仕事をしてみると、生徒達は音楽が大好き、教師達は厳しい環境ながら、少しでも良い授業をしたいという気持ちを持っているのが伝わってきて、私の気持ちも前向きになって行きました。こうした現地の人々の姿勢があってこそ、ボランティア活動の成果を上げることができるのだと実感しています。

一方、日常生活では良き隣人に恵まれ、快適な毎日でした。ラマダンやイードといったイスラム教の行事では、苦労もありましたが、休暇中には、サハラ砂漠やマラケシュ、エルジャジーダなどへ国内旅行を楽しみ、充実した二年間となりました。

出前講座レポート　（2017年10月～2018年7月）

「南米エクアドル滞在で学んだこと」

10月22日(日)　講師　弓　貞子　会員

美浜区打瀬公民館コアにおいて、NPO法人フォーラムパートナーズの定例会で講演が行われました。

生憎の台風による大雨で、参加者は20数名でした。グアランダというアンデスの山中にある田舎町の国立大学の看護学部で、2年間の活動と生活の様子や体験したことを紹介されました。スペイン語の大きな壁に阻まれながら、教員の後について行った学生への指導が、帰国間際には少しできるようになったこと、物品が不備な実習室を少しでも使えるようにと担当教員と共に整備したことなどを話されました。

エクアドルは、日本の国土の3/4ほどの面積。人口構成は、インカ由来の原住民、スペイン人との混血、黒人や白人などですが、人種間の差別意識は、特に大学や病院では感じられなかったようでした。エクアドル人は、海抜0mから4000mの地点に住み、標高差・気候条件に応じた産物などがそれぞれにあり、特に果物は豊富で物価の安さを感じたことなど写真で紹介されました。

生活面では、あまり約束をきちんと守る習慣のない大家さんとのトラブルや、自分で行うプロパンガスボンベの交換、お湯にならないシャワー、不便な郵便事情等々、苦労話は尽きないようでした。それでも職場の同僚や学生に恵まれ、貴重な異文化経験、貧しくとも相互扶助精神で頑張る人々からの学びなど、充実したボランティアであったことを話されました。

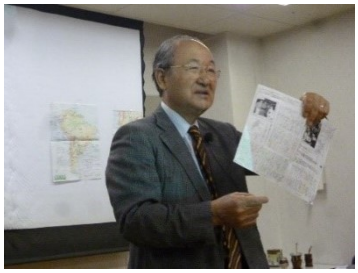
民族衣装やカラフルな民芸品の現物紹介もあって、聴衆は興味を持ち熱心に聞き入り、具体的な事について何点か質問があり2時間の話は終わりました。

「アルゼンチンと日本の自然と文化と社会の比較」

11月8日(水)　講師　阿部清司　会員

市原市市津公民館において25名の参加者を対象に講演会が行なわれました。講師は、派遣先のラプラタ大学大学院で日本経済を教えました。

アルゼンチンの紹介に始まり、氷河、パンパ等日本にない自然環境、食べ物、国民性、人情、親しみやすい友好性などについて、多数の美しい写真を用いて丁寧に説明されました。次いで、アルゼンチンにない日本の良さ、日系移民の活躍等について話し、両国の生活、文化、国民性の違い等を比較しながら、参加者の一番知りたがっていることを述べて、聴衆の心を掴みました。



外国人との長年に亘る交流による体験談に基き、「言葉はコミュニケーションの手段に過ぎない。相手の目線で考え、心を開いて真心を持って交流せよ。」との異文化を理解する上で重要なポイントを指摘されました。

講演には、夫人も参加され、伝統文化であるマテ茶の飲み方について、現地の茶器を用いて説明され場を盛り上げました。

参加者は、最後まで熱心に耳を傾けて、多くの活発な質問が出ました。

「スリランカについて学ぼう」
2月16日（金）　講師　山崎　豊　会員

市原市有秋公民館において、23名の参加者を対象に講演が行われました。講師は、派遣先の教育大学で先生となる学生に数学教育を指導しました。

スリランカには、北海道よりやや小さい島に、2千万人強の人が住んでいます。スリランカ人の顔はインド人と同じようですが、彼等は、おとなしく礼儀正しく、大声で自己主張をしません。同国のカレーはインドのものより遙かに辛く、日本人の口には痛いと感じる程です。ドリアンの味は他の国と同じですが、不思議なことに独特の臭いが、少ないです。

スリランカは、大変親日的であります。元大統領は、1951年のサンフランシスコ講和条約で日本を弁護し、本土が分割されることなく条約が締結された恩人であります。また、元大統領の遺言により左目の角膜は、日本女性に移植されました。

講師は、徹底的に聴衆の知りたがっている、スリランカはどういう国か、生活は、文化は、等に関して、職場や住民との交流を通じた臨場感溢れる体験を語り、彼らの期待に応えました。また、現地の教育現場をうまく説明し、参加者の理解を深めました。

「素敵なパラオの人々」
4月21日（土）　講師　中村時夫　会員

東京都杉並区高井戸第三小学校において、5、6年生163名、先生5名、父兄他20名の参加者を対象に出前講座が行なわれました。

①授業に先立ち質問アンケートで課題を与え問題意識を持たせ、②回答者を指名して対話しながら基本知識を確認させ、③要点が相手に分かる様に対話をリードし、意見を問うことで思考を深めさせ、④最後に講義内容を整理させるアクティブ・ラーニング法で授業を行いました。

またパラオ人の親日感に時間を割き、パラオの国旗が日の丸と同じデザインであることの理由や、未だに広く使われている日本語について述べました。パラオで使われている「サルマタ」とは何かと生徒に尋ねたら、誰一人分からず、若い4人の先生に聞いても答えられませんでした。

ユーモアを交え、約80枚のスライドを用い、さらに生徒の積極的参加と理解促進を促すやり方で、生徒達は最後まで飽きることなく、積極的に参加していました。

途上国の援助は、税金の無駄使いではないかとの質問に対して、資源のない国が資源を確保して、世界の人々が仲良く暮らすために、援助は必要であり、JICAはその役割を担う大切な機関であることを説明されました。

最後に、「パラオの人はどんな人」、「今日の授業の感想は」との問いに対し、一斉に多くの生徒が手を挙げ、活発に意見を述べました。絶えず生徒に発言させ、生徒の意欲を引き出させる見事な講義でした。

「パラグアイで接した人々の生活と自然」
７月25日（水）　講師　高瀬義彦　会員

今年度は、うらやす市民大学のオープン講座において当会から5名の講師を派遣し、JICAの国際貢献を6回講義することが計画されています。今回は、第１回目として高瀬氏が26名を対象に講義が行われました。

講師の専門はメカトロニクスで、パラグアイの国立アスンシオン大学で学生を指導しました。

講師は、パラグアイの国情、文化、歴史、生活、食べ物、同国人との交流などについて、沢山の資料とスライドを用いて説明されました。移民として入植した日系人の大きな貢献があり、日本人は高い評価を受け友好関係が続いています。現在約7,000人の日本人・日系人がパラグアイに住んでいます。

講師の使用したパラグアイの動植物類を紹介したスライドは、写真が美しくプロ並みであったと、聴衆から好評でした。

参加者は、問題意識の高い聴衆が多いように見受けられました。熱心に講義を聞き、質問も多数出されました。

質問時間が限られていた中で、質問が多くでたため、時間不足の感がありました。

また、「次回以降の講演が楽しみである。」という意見を多く頂きました。

派 遣 国 事 情　現在派遣中の会員、最近帰国した会員のホットな現地情報です。

カンボジア

竹と縄の手造り橋

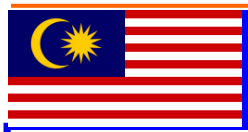
職種　コンピュータ技術　　山﨑勝也

カンボジアの首都プノンペンから北東に150キロ近く行った所に、コンポンチャムという街があります。ここはフンセン首相出身県の中心地ですが、またカンボジアの紙幣に描かれている『橋』のある街でも知られています。この橋は日本によって造られたもので、紙幣には日の丸も描かれています。この橋は、アジアの大河メコン川に架けられたものですが、ここにはもう一つ、川の中州の村へ行く橋があります。正式な名前は知りませんが、私たちは通称『竹橋』(写真)と呼んでいます。

この橋は雨季の時には存在せず、乾期になると現れます。とは言っても、自然現象で現れるものではありません。メコン川は乾季になると水量が減り、流れも穏やかになります。穏やかになり始めたその時に、なんとこの橋は住民の手で造られるのです。

鉄骨も釘も道具も使わず、竹と縄の手造りです。距離にして１キロ弱ですが、2か月程度で完成するようです。手造りの橋というと、吊り橋のようなイメージで人が歩ける程度と思われるでしょうが、実際行って驚きました。自転車も車も、場所によっては、車の相互通行も出来るのです。吊り橋のように揺れることもありません。竹と縄の手造りで、このようなしっかりとした橋が出来ることに、驚かずにはいられませんでした。

ではこの橋はなぜ雨季に無くなるのでしょうか？そうです、川が増水して自然消滅してしまうのです。毎年この繰り返しを行ってきた橋ですが、昨年鉄筋の橋が近くに出来たことで、残念ながらお役御免となりました。ただ、今年も観光用として小さな橋が造られたと聞いています。



マレーシア

とあるサペレレ作者との出会いと別れ

職種　電気通信　　建川大輔

私の活動しているマレーシアのボルネオ島サラワク州には、30以上の民族や言語がありますが、それぞれ独特な音楽文化を持っています。

サペという弦楽器は、古くはボルネオ島のインドネシア側、カリマンタンで生まれたとされる楽器で、もともとはスピリチュアルな祈祷に関連して用いられたと聞きます。サペは木をくりぬいて作られます。楽器の裏側はオープンな構造で、横から見ると舟の形をかたどっています。通常４弦ないし６弦で、一番はじの弦にはメロディー演奏用にギターのようなフレットがついていて音階が出せます。残りの弦は固定した音しか出ず、リズム取り兼通奏低音的に演奏されます。

この楽器は通常、人の身長くらいの長さがありますが、私は特に小さいサイズのサペレレと呼ばれるものが欲しくなり、作れる人を探していました。

ある日たまたま出張先のホテルの宴会場に演奏に来ていた若いサペ奏者たちに会って聞いたところ、彼らの先生にあたるB･ブラウニーさんという方がサペメイカーだとのことで、連絡先を紹介してもらい、Whatsappというメッセンジャーで連絡したところ、製作を快く引き受けて下さいました。そして10日ほどたったころ、Facebookの彼のページに、娘さんが彼の訃報を上げていたのに気づき、とても驚きました。

マレーシアでは、先進医療や救急救命が未発達なせいでしょうか、私と同年代の人が突然亡くなったりします。彼は60歳、退職後にサペ作りを始めたそうです。娘さんとメッセンジャーでチャットをしていたら涙がでました。翌日の葬儀に約500キロの道のりを車を夜通し走らせて参列し、大聖堂に置かれた棺の小さなガラス越しに彼の顔を見ることができました。墓地で彼の友人たちと話をしました。私のためのサペは作りかけだったそうですが、サペ作りの師匠が残りの制作を続けてくれるという話になりました。数か月したころ、サペ師匠の家を訪れたところ、彼から引き継いだはずのサペは見当たりませんでした。

その後、なんとなくうやむやというかモヤモヤした気分で過ごしていました。ある日、任地のミリの街で、サペ･ムーブメントというミニコンサートが催され、その会場にサペレレの展示即売コーナーがありました。６弦のサペレレ、私が彼に頼んでいたものと同じ仕様です。そこで買うことにしました。作者にサインをもらいました。作者と一緒にとった写真を、件のサペ師匠にメッセンジャーで送ったところ、そのサペは彼の工房から出ていったものの一つだということでした。してみると、これが、もともとブラウニーさんが手がけたものかもしれない、いやたぶんそうだ、きっとそうだ。彼の遺作が、何人かの手になる加工制作を経て完成し、たまたま巡り巡って私のところにやって来たのだ。そう思うと嬉しくなりました。

いま私はサペを週二回、サペ教室に通って習っています。そして10月日本に帰国したら、「日本サペ協会」というような同好会を作るのが目下の夢です。

モロッコ

永く住んでいたくなるモロッコ

職種　日本語教育　　増田光司

モロッコの私の日本語教育の任地はマラケシュ、当地のカディアヤド大学で日本語を教えています。

マラケシュはフェズと並び、モロッコの二大観光都市。これはどういうことかと言えば、外国人には、二重価格の存在。要するに旅行者はぼったくられ、外国人は旅行者にみえるので、これに慣れるのが大変。マラケシュは近郊にスキー場、北アフリカ随一のトゥプカル山(4,156m)などあり、砂漠は遠いのに、砂漠旅行の基地でもあります。

しかし、マラケシュと言えば、フナ広場と暑さでしょうか。フナ広場はメディナ(道が入り組む旧市街)にある、ただ、ただ、だだっ広い広場ですが、そこに何千人もの人が集い、楽隊の演奏、踊り、蛇遣い、輪投げ、ボクシング、賭け事など大道芸、食べ物の屋台に、スリにかっぱらいと何でも揃い、そのスケールの大きさは世界の奇観。屋台を日本人が歩けば、「こんにちは」はよいとして、誰が教えたか「高田馬場」「貧乏プライス」と様々な声がかかり、手を引っぱられ、なかなか前に進めません。

マラケシュの暑さはモロッコの大都市の中で随一ながら、今年は30年ぶりの涼夏とか。だが、年配のボランティアには、陽の熱さと熱風に外出不能の閉じ籠りも、それでも去年に比べれば天国？か。去年は5月まで蚊に喰われ、6月に入ると虫が好かぬか、虫も避暑か、蚊・蠅がいなくなる暑さ。ただ、モロッコ全体がこの暑さではなく、例えば首都のラバトなど夏にも30度を超えず、間違いなく日本の夏に比べれば天国、海岸の都市全般がこのようです。

人情について書く余裕がなくなりましたが、モロッコ人は人間らしく、日本人は真面目が過ぎて、仕事ぶりは機械のようといったところか。モロッコ人の仕事のいい加減さは日本の常識では考えられない程度、両者を比べて、丁度いいのがフランス人とはフランス人の言葉。どちらが幸せなのかはよく考えるところ。ただ、青年海外協力隊員、特にうら若き女性は、帰国後、またモロッコに来てほかの仕事を始める人が多いのも事実、私の在モロッコ派遣期間1年9か月の間に少なくとも4人がこの様。これは何故と考えるこの頃です。

ドミニカ共和国

太陽が貧しさを隠す島

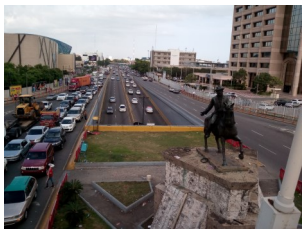
職種　理学療法士　　石原建夫

ドミニカ共和国に派遣され８か月が経ちます。生活に慣れ、最初に見えたもの、そして今、見えてきたもの、そんな生活を紹介します。

私の任地は首都サントドミンゴでビルが多く、また緑の多い街です。車で海沿いの道路を走るとカリブ海が見えます。晴れた日は海の色も薄い青になり、白い砂浜と色の調和も明るい景色になります。

朝夕の交通量は多く、タポン（栓）と称される渋滞が続きます。ベンツ、レグザス、フォードムスタングなど高級車が闊歩し、それに交じって70年代と思われるカローラが現役のタクシーとして庶民の足として頑張っています。

我々の交通手段は、地下鉄とグアグアと呼ばれる古い乗り合いバスです。グアグアの料金は25ペソ（約50円）です。グアグアに乗ると、売り子の人が同乗しお菓子などを売ります。一度はラジカセを担いだ兄ちゃんが入ってきて、ずっとラップをかけ、バスの中は会社の慰安旅行のようになり大盛り上がり、でも最後に帽子が回ってきてお金！！！出さない人も多く、もちろん私は払いませんでした。彼は降りる時、今日は大したことないと捨て台詞を吐いていたようです。



街の治安は良く、人々は朝早くから活動しています。ハイチからの出稼ぎの人も多くいます。高級車の傍らで、多くの子供達が靴磨きをしています。国民性は明るくとても親切です。お金持ちも貧しい人たちも、楽しそうに生活しています。気候も熱帯性気候で、太陽がいつもフルーツなど芳醇な食べ物を産出し、衣服は軽装で済みます。貧富の差はあまり目立ちません。これが雪深い、食料に事欠く地だったら、マッチ売りの少女だったら、悲しいお話になります。しかしこの国では、悲しい話は太陽に隠されてしまいます。けれども貧富の差は確実に存在し、日本とは比べものにならないぐらいの大きさです。

それでも、朝から皆明るく仕事をしています。そんな人たちが幸せになれるよう、活動していかれればと思っています。また、この国の明るさを日本が、見習えるようになればいいと思っています。

会員の動静

・会員数　112名（平成30年9月末現在）

平成30年2月1日から平成30年9月末日までの間に帰国された方は次のとおりです。（敬称略）

・鈴木 核（市川市）	ザンビア	経営管理
・中西 陽典（我孫子市）	アルゼンチン	経営管理

平成30年9月末日現在の派遣中の方は次のとおりです。（敬称略）

・麻生 伸彦（茂原市）	バヌアツ	コンピュータ技術
・石原 建男（富里市）	ドミニカ共和国	理学療法士
・岩井 潮里（千葉市）	ソロモン	栄養士
・浦木　仁　（市原市）	コロンビア	品質管理
・大西 和夫（千葉市）	コロンビア	QC・生産性向上
・神林 恒男（柏市）	コロンビア	QC・生産性向上
・佐々木　英夫（流山市）	ペルー	日本語教育
・島中 一俊（千葉市）	ミャンマー、	コンピュータ技術
・髙﨑 忠信（佐倉市）	カンボジア	コンピュータ技術
・高田 將之（船橋市）	チリ	剣道
・建川 大輔（鎌ヶ谷市）	マレーシア	電気通信
・畑野 郁子（習志野市）	アルゼンチン	日本語教育
・増田 光司（市川市）	モロッコ	日本語教育
・宮澤 三造（佐倉市）	タイ	コンピュータ技術
・宮野 伸也（千葉市）	スリランカ	養蜂
・村田 佳聡（船橋市）	マーシャル	コンピュータ技術
・山崎 勝也（八千代市）	カンボジア	コンピュータ技術
・吉田 知弘（君津市）	チリ	作業療法
・田畑 成章（柏市）	インドネシア	経営管理

国際フェスタCHIBA

5月27日(日)、神田外語大学で、主催ちば国際コンベンションビューロー、共催JICA東京による「国際フェスタCHIBA」が開催されました。

当会のブースは、会員の活動の様子を写した新パネルを展示し、出前講座のPRや、シニア海外ボランテイア応募希望者への説明などをしました。

当会の国際クイズには、2問正解すると外国のお土産がもらえるとあって、親子連れが次々と詰めかけ、景品が足りなくなるのではないかと心配したほどです。 最終的にクイズの参加者は80名となり、景品はほとんどなくなってしまいました。 応対した渡邉、濱 崎、崎 元、村 田 の4役員は大忙しでした。

浦安市多文化共生・環境フェア

6月9日（土）10:00～16:00、新浦安駅前にある市民プラザWave101で開催されました。役員と応援会員の総勢8名が対応し、ボランティア活動が分かる写真のパネル展示と、国際クイズを行いました。2問正解者が、会員からの外国のお土産品を貰えるということで人気が集まりました。さらに、今回はクイズに出てきた国を世界地図で探し、その国の挨拶語３つ（おはよう、ありがとう、さよなら）を覚えて貰い、多文化理解に繋げようという趣向を加えました。

約300名の方がブースに立ち寄られ、クイズにも86名が参加され楽しんで頂きました。

JICA海外ボランティア千葉県庁表敬訪問

6月15日（金）小雨降る中、帰国者4名、出発予定者19名計23名が、県庁を表敬訪問しました。

JICA東京長谷川次長が来賓を代表して挨拶し、JICAの役割は発展途上国を助けることと、帰国したボランテイアが、地方の中小企業の海外展開に協力してゆくことも大きな目的であると述べられました。

その後帰国者及びこれから出発するボランテイアが挨拶し、自己紹介と抱負を述べました。

最後に冨塚総合企画部長が挨拶され、先ず2年間任国で活躍し帰国した4名のボランテイアのご苦労を労い、それぞれ任国で尽くした仕事の成果は将来生かされることでしょう、またその経験を宝としてこれからの仕事に生かしてほしい。これから出発する方々に対しては、発展途上国の開発に貢献したいという高い志に敬意を表し、皆さんが任地で元気に活躍して2年後にまたお会いしたいと激励されました。